



大阪+知的障害+地域+おもろい=創造

## 知の知の知の知

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所情報誌通算 4260 号 2018.3.15 発行

「京都盲啞院」関係資料、重文に 国内初の公立支援学校 京都新聞 2018年3月14日



点字の導入以前に作られた木製教材「木刻凸凹字」(左)と、凸状に加工した紙製の教材。子どもたちは手で触れて文字の形を学んだ(京都市北区・京都府立盲学校)

明治時代初期に開校した国内初の公立特別支援学校「京都盲啞(もうあ)院」の関係資料が重要文化財に指定されることが、このほど決まった。近代日本の障害者教育で先駆的な役割を果たした教材や文書の数々。資料を保管する府立盲学校(京都市北区)、府立聾(ろう)学校(右京区)の教師らは「ゼロから創意工夫で取り組んだ教育内容が評価された」と喜び、資料の

活用を模索し始めている。

盲啞院は1878(明治11)年に設立。すでに番組小で視覚・聴覚障害向けの教育に取り組んでいた古河太四郎が初代校長を務めた。子どもの障害に応じた教材開発や、海外の先進事例の導入により、基礎学力の習得と、手に職をつけるための職業訓練に力を入れた。

指定されるのは、板に彫った文字に触れて形を学ぶ「木刻凸凹字」や、米国で考案された口や舌の動きで発音を学ぶ「視話法」の説明図など教材・教具類、開校や寄付に関する文書など多様な計3千点。

背中や手のひらに指で文字を書いて教える盲啞院の授業の様子を描いた「盲生背書之図」や、日本画家として成功した卒業生の作品も含まれる。近代教育史上、学術価値が高いと評価された。

盲啞院は、府立盲学校と府立聾学校の前身にあたる。両校の資料室には、特徴的な教材のほか、学校の歩みを伝えるパネルを展示。事前予約で見学可能で、研究者も利用しているという。

「今回の指定は、子どもの励みや教師の努力の礎になる」と聾学校の酒井弘校長(62)は喜び、「重文を持つ学校に恥じない教育を進めたい」と気を引き締める。

盲学校の中江祐校長(58)は「資料が伝える一人一人にあった教材開発は現在にも通じる。自分たちの教育活動に生かしたい」といい、活用法を探っていくという。

芸術選奨贈呈式、「観客に感謝」 受賞の俳優、永瀬正敏さん

西日本新聞 2018年03月13日

文化庁は13日、2017年度芸術選奨の贈呈式を東京都内で開いた。河瀬直美監督の

映画「光」などでの演技が評価され、文部科学大臣賞を受賞した俳優の永瀬正敏さん（51）は「作品は見てもらって初めて完成するので、観客の皆さんにまず感謝したい。まだまだの役者だが、一步一步頑張っていく」と話した。

芸術選奨の贈呈式であいさつする永瀬正敏さん＝13日午後、東京都千代田区知的障害者の表現をアートとして発信する活動「表現未満、実験室」で、新人賞に選ばれたNPO法人クリエイティブサポートレッツ（浜松市）代表理事の久保田翠さん（55）は「障害福祉施設を社会に開く活動を芸術と認めてもらった。新しい時代が来たのかなと喜ばしく思う」と語った。



## 介護施設職員の虐待 過去最多 16年度、県内で5件

東京新聞 2018年3月14日 群馬

デイケアサービスやグループホームなど県内の介護施設で二〇一六年度、施設職員による高齢者への虐待が五件あったことが県のまとめで分かった。調査を始めた〇六年度以降では最多で、県地域包括ケア推進室は「虐待に対応する市町村への支援や民間団体を通じた連携強化を図り、虐待被害の防止に努めたい」としている。

施設職員らによる高齢者虐待の報告・相談件数は十九件（前年度比三件増）で、うち五件（四件増）で虐待が確認された。被害者は六十五歳未満の障害者を含む要介護度三～五の男女五人。虐待の内容は暴行など身体的虐待に、暴言など心理的虐待や介護放棄が重複しているケースが多く、看護職や介護職の職員が加害者になっていた。

県は虐待があった施設に対し、新規利用者の受け入れを一定期間停止するなどの行政処分や改善指導を行った。

家族や親類など養護者が加害者になった高齢者虐待の相談・報告件数は二百七十五件（三十二件減）で実際に虐待が認められたのは百五十四件（九件減）、被害者数は百六十人（十人減）。被害者の八割近くが女性だった。

虐待した側は被害者の息子が37・3%で最多、次いで夫26・0%、娘17・8%と続いた。

虐待の種別（重複あり）は身体的虐待73・1%、心理的虐待34・4%、経済的虐待20・0%、介護等放棄19・4%、性的虐待2・5%。虐待の要因（複数回答）については、虐待者の障害・疾病、家庭の経済的困窮、介護疲れ・介護ストレスなどが上位になった。（石井宏昌）

## 介護が必要な姉を放置し死なせた妹夫婦 検察が懲役7年求刑 前橋地裁

産経新聞 2018年3月14日

群馬県安中市で昨年2月、介護が必要な知的障害のある姉＝当時（50）＝を妹夫婦が放置し死亡させた事件で、保護責任者遺棄致死の罪に問われた、いずれも同市の無職、佐藤正夫（31）と妻の恵美（32）の両被告の裁判員裁判の論告求刑公判が13日、前橋地裁（国井恒志裁判長）で開かれ、検察側は懲役7年を求刑した。

検察側は、恵美被告の姉の萩原里美さんが寝たきりで重篤な状態というのを知りながら、医療措置などを受けさせることなく放置した2人の犯行態様は悪質と指摘。

萩原さんは死亡時にやせ細り「見るも無惨に変わり果てた」とし、被害結果は極めて重大と非難した。また、2人が萩原さんを引き取ったのは、貯金や障害者年金目当てだったことは明らかだと主張した。

## 家族のように障害者支えたい フィリピン人・ウィリーザさん 春から「長光園」に勤務

## 佐賀女子短大で福祉を専攻 兄姉に障害、深い思いやり 佐賀新聞 2018年3月14日



友人や前山准教授(右)と話すウィリーザさん(右から二人目)＝佐賀市の佐賀女子短期大学

佐賀女子短期大学を卒業したフィリピン人の留学生ウィリーザ・カリーニョ・ボルンタテさん(29)がこの春から、佐賀市の障害者支援施設「長光園」(宮崎一哉園長)で働く。障害者施設で働く外国人はまだまだ少数。障害のある家族と育ったウィリーザさんは「家族のように支えていきたい」とほほえむ。

ウィリーザさんは同短大で介護福祉を専攻し、介護施設での就職を目指していた。昨年2月、長光園で4週間研修するうちに、「ここだと、家族と暮らしていたフィリピンに近い環境で働ける」と興味を持ったという。10人きょうだいで育ち、そのうち4人の兄姉に知的障害があったからだ。昨秋も再度研修に訪れ、就職を決意した。

学校の勉強にも熱心に取り組み、レポート1枚に1週間かけることもあった。指導してきた前山由香里准教授は「大家族で育った強みで、常に誰かのことを気にし、言わなくても自然と気づいてくれる。コミュニケーション能力も高く、言葉が通じない部分があってもカバーできる」と評価する。

障害者の家族らでつくる「佐賀県手をつなぐ育成会」によると、障害者施設で働く外国人は「きわめて少数」。長光園でも初めての外国人の職員。宮崎園長は「今後、外国人の働き手も増えてくるだろう。いずれは指導する立場になってほしい」とエールを送る。

## 障害者が作る秘伝の味「蒸しまん屋」 商店街活性化に一役(京都)



福祉新聞 2018年03月14日 編集部  
上京ワークスの利用者が接客する

二条城や晴明神社に近い京都市の堀川商店街に、近所の人や観光客に人気の「蒸しまん&カフェ まんまん堂」がある。社会福祉法人京都ワークハウスの障害者就労継続支援B型事業所「上京ワークハウス」(藤井嘉子所長)が営み、今年でリニューアル10周年を迎える。

まんまん堂は、手作り蒸しまんのテイクアウト専門店として2004年にオープン。08年10月に商店街の空き店舗を借り、カフェスペースを備えた店に生まれ変わった。

蒸しまんは「多くの事業所でやっているパンやクッキーと違う食品を作りたい」という思いで、中国残留孤児から作り方を教わってスタート。その後、独自の工夫を重ねた。

製造場所は、徒歩2分の上京ワークハウス。利用者4人と職員1人が、鳥取県から取り寄せた大山牛乳を混ぜた皮をこねて伸ばし、秘伝の味付けをした具材を包み蒸し上げる。1週間で製造できるのは300個。それをまんまん堂で温めたり、冷凍し宅配したりする。

### 10周年を迎えるまんまん堂

作っているのは、豚肉・玉ネギがメインの「肉まん」、豚肉・白菜・春雨入りの「菜まん」、十勝産粒あんを油で炒めた「あんまん」(各100円)など。季節ごとに桜



まんや栗まんなどの変わりまんも作る。小さめながら、具材がたっぷり入っておいしいと評判で、多い日には50個売れるという。

蒸しまんに匹敵する人気で1杯280円のコーヒーと1食650円のランチだ。特にランチは毎日25～30人が来店するほどで、近所の人の憩いの場になっている。

「16年に北野天満宮の近くに2号店をオープンした。今後の課題は、製造量を増やしていくことと、いま平均1万4000円の月額工賃を増やすこと」と言う藤井所長。「利用者がいきいきと働ける場はもちろん、地域の人がつながれる場にしていきたい」と話す。

「元気満々、やる気満々」から名付けられたまんまん堂。空き店舗が増え、来客が減少している堀川商店街の活性化にもなっているようだ。

**寄付食料を福祉施設へ 「カーブス」高知県内10店が寄贈** 高知新聞 2018年3月14日  
会員から提供された食料を届けるカーブスのスタッフら(13日午後、高知市布師田の児童養護施設「愛仁園」)



女性専用フィットネスクラブ「カーブスジャパン」(本社東京)の高知県内10店舗(高知、南国、土佐、香南市)が13日、会員が持ち寄った食料を高知市の児童養護施設「愛仁園」など3カ所に贈った。

カーブスは、家庭で余った食料などを集め貧困家庭や福祉施設などに届ける活動「フードドライブ」を全国で展開。県内では2008年から取り組んでいる。

「少しでも社会に役立てば、と活動を毎年楽しみにして下さる会員さんも多い」とカーブススタッフの浜田晃子さん。今年は約千人の会員から小麦粉や油、菓子など計約1・1トンが集まった。

このうちの一部が愛仁園のほか母子生活支援施設「ちぐさ」、県女性相談支援センターに届けられ、子どもらが笑顔で受け取った。「フードバンク高知」(高知市)を通じ生活困窮者にも配られる。

同バンクによると、県内で企業を挙げてフードドライブを行っているのはカーブスだけ。同バンクの青木美紀代表は「カーブスさんだけでは支援に必要な分の3カ月程度しか賄えない。もっと企業や学校などの協力をお願いしたい」と呼び掛けている。同バンクは普段から食料を受け付けている。連絡先は088・875・4751。(早崎康之)

**障害児の絵画オークション 希望額飛び交い、会場熱気** 佐賀新聞 2018年3月14日  
お目当ての作品を落札する来場者=佐賀市の自然の英語工房



「ああゆるプロジェクト」のステイブ・セイガー代表(右)に感謝の手紙を読む「いーはとーぶ」の子どもたち=佐賀市の自然の英語工房



自分らしい生き方を考える「ああゆるプロジェクト」(佐賀市)と障害児の放課後通所施設「いーはとーぶ」(小城市)が11日、佐賀市でアートオークションを開いた。障害児たちが手掛けた絵画26点が出品され、お気に入りの作品を落札しようと、何度も手を揚げる来場者も見られた。

オークションが始まると、会場には落札希望額の声が飛び交った。提示価格から2倍以上の値段で競り落とされるなど、会場は盛り上がりを見せていた。

4点を落札した江副千鶴子さん（57）＝同＝は「誰も思いつかないデザイン。見ると元気が出る。職場に飾りたい」と話した。

作品はプロジェクト代表で絵画講師を務めるスティーブ・セイガーさん（50）＝佐賀市＝が、子どもたちの絵に色を足すなどして仕上げた。セイガーさんは「芸術は一人一人の個性を尊重しながらも、皆が一つになるための力にもなる」と話した。

オークションの売り上げは両団体の運営資金のほか、東北の復興支援にも充てられる。

## 紙面審ダイジェスト 過去の差別的表現 現在の報道に工夫の余地は

毎日新聞 2018年3月13日

紙面審査委員会は、編集編成局から独立した組織で、ベテラン記者5人で構成しています。読者の視点に立ち、ニュースの価値判断の妥当性や記事の正確性、分かりやすさ、見出し、レイアウト、写真の適否、文章表現や用字用語の正確性などを審査します。審査対象は、基本的に東京で発行された最終版を基にしています。指摘する内容は毎週「紙面審査週報」にまとめて社員に公開し、毎週金曜日午後、紙面製作に関わる編集編成局の全部長が集まり約1時間、指摘の内容について議論します。ご紹介するのは、その議論の一部です。

以下に出てくる「幹事」は、部長会でその週の指摘を担当する紙面審査委員会のメンバーです。「司会」は編集編成局次長です。

<3月2日>

### ■過去の差別的表現 現在の報道に工夫の余地は

幹事 旧優生保護法の下で障害者らに行われた強制不妊手術の問題を報じる記事で、現在は差別的な表現だとして新聞紙上で使われない用語がしばしば出てくる。「精神分裂病」「精神薄弱」「精神病」「色盲」などだ（「毎日新聞用語集」によれば、それぞれ「統合失調症」「知的障害」「精神障害」「色覚障害」に言い換えるとなっている）。記事はいずれも過去に資料などで使用された用語を歴史的事実として書いており、それ自体は当然だと思う。カギカッコでくくって書いたり、当事者の心情の記事に盛り込んだりするなど、差別・偏見を広げないように努めていることも理解できる。ただ、こうした用語が頻出すると、もう一步工夫する余地はないだろうかという気もしてくる。

例えば、20日朝刊社会面の<北海道／不妊手術 記録を公表／旧優生保護法下 審査の93%「適切」>には以下のくだりがある。「手術を認めた主な理由については、当時の分類で『精神病』532人▽『精神薄弱』558人▽『精神病質』17人だったとし、『身体疾患』（15人）や『奇形』（7人）もあった。道は該当する具体的な疾患名について明らかにしていないが、旧優生保護法ではそううつ病や顕著な性欲異常、犯罪傾向、全色盲などを幅広く対象にしていたという。「当時の分類で」とことわっているが、「精神病」「精神薄弱」「奇形」「性欲異常」「色盲」と続くと、少し抵抗感があった（せめて「性欲異常」「犯罪傾向」「全色盲」はカギカッコでくくった方がよかった）。

強制不妊手術の問題では、今後もこうした用語を使わざるを得ないだろう。早めに対応を議論しておいた方がよいのではないか。紙面審では、以下のような案が出た（結論というわけではない）。

- (1) 差別的な用語は必ずカギカッコでくくる。
- (2) 一つの記事の中で、差別的な用語の使用数は最小限にとどめる。
- (3) 差別的な用語の後に丸カッコで現在の表現を付記する。例えば「精神分裂病」については「（現在の『統合失調症』）」と補う。ただ、「遺伝性精神薄弱」の場合に「（現在の『遺伝性知的障害』）」としていいかどうか、分からない。
- (4) [おことわり]などの形で、現在は使わない用語であることを明示する。

司会 いろいろな部で連携して取り組んでいる問題だ。各部に聞いてみたい。まず地方部。

地方部長 旧優生保護法の問題は、今の価値観からすると違和感がある。人権意識が高まり、法律自体が受け入れられないという感覚になっている。それと表裏一体で、当時の病名にも差別的なものがあるが、これはむしろ時代を映し出す証拠なので、そのまま載せるべきだと思う。紙面審に案を示してもらったが、なかには気分を悪くする人もいるだろうから、多く出てくる特集面では「おことわり」を入れてみることも考えたい。日々の紙面では、カギカッコでくくるのも一案だが、この日の紙面で言えば、カギカッコが非常に多くなって煩雑になるなという気持ちが現場にはあったようだ。「当時の病名では」などの注釈を入れるなど、注意をはらいたい。傾聴すべき指摘をいただいた。

司会 生活報道部。

生活報道部長 地方部長の話とほぼ一緒だが、カギカッコでくくらずにでもいいのかと思う。よく新聞社ではカギカッコでくくるが、そのニュアンスが読者に伝わっているのかと思っている。カギカッコでくくると、行数が増えてしまう。あくまで当時の病名であることを冒頭できちんと書いておくことが必要なのかなと思う。今使わない言葉ばかりで、最小限にとどめたい、あまり読みたくない、という思いもあるが、こうした言葉自体がくくり方やレットルの貼り方が、いかにすごいかが如実にわかる気がするので、あえて数は抑えなくてもいいのかなという気持ちはある。

司会 医療福祉部。

医療福祉部長 4案で言えば、(2)だ。カギカッコは先ほども出たように読者に意味が伝わるのかという疑問があるので付ける必要はない。地方部長も言っていたが、当時の表現は載せるべきだ。新聞を作るわれわれも反省という意味でもきちんと載せるべきだと思う。ただ、たくさん載せると、今まさに裁判を起こそうとする人たちを「こういう人なのか」と邪推させるリスクもある。最小限にしていくのがいいのではと思う。当時の病名だという「おことわり」を載せるのが落としどころではと思う。

司会 校閲。

情報編成総センター編集部長(校閲) カギカッコでくくれば逆に目だってしまうリスクはある。当時の病名だという意味が書き手にあっても、読み手に伝わらない。当時の該当する条文そのものをカギカッコでくくる、というのもあるかもしれない。(3)は薦められない。逆に遺伝で、恋愛もできないのかと思わせてしまう可能性もある。知的障害に仮に遺伝的なファクターがあるにしても、それだけではなく、環境的な要因とかもある程度あると思うので、「おことわり」の文言にしても注意を払って書かねばならない。

司会 今後特集面を組むときには、「おことわり」を入れた方がよいかも。

社会部長 毎回「おことわり」を入れるのは難しいから、病名がずらずら並ぶときに、最後に「当時の疾患名」と入れるとか。

司会 特集面では、条文なども入れるようにしているが、それもこうした点に注意しないといけない。

## ■「追い抜き」に戸惑った

幹事 22日朝刊1面2番手の平昌五輪記事の見出しは<女子 スピード 追い抜き 金>。一瞬、女子はスピードスケートで何を追い抜いて金メダルを取ったのか？ オランダチームを追い抜いたってこと？と頭が混乱した。

「追い抜き」とは「パシュート」のことだった。新聞は全紙「追い抜き」だったが、テレビは「パシュート」と連呼していたので、試合の翌日朝刊の「追い抜き」と結びつかなかった。朝刊のテレビ欄も「パシュート」だ。本紙は「追い抜き」を使うと決めているのだろうが、記事の初出は「スピードスケート女子団体追い抜き(パシュート)」などと表記したほうが、読者に親切ではないか。

社内の記事データベースで見ると、10年のバンクーバー五輪では「団体追い抜き(チームパシュート)」と表記している。産経の23日朝刊2面社説の見出しはなぜか<パシュートの金/「団結と個の力」学びたい>で、記事は「スピードスケート女子団体追い抜き(チームパシュート)」となっていた。ところで、「パシュート」は「追い抜き」より「追跡」

という意味ではなかろうか。

司会 運動部。

運動部長 指摘の趣旨はよくわかる。開催期間中も複数の読者から「なぜパシュートと書かないのか」と問い合わせが来ていた。共同通信もそう表記している。種目自体は新しく、五輪に入ってきたのは06年のトリノからだ。スケートで始めたのも1990年代後半からだ。パシュートに日本語をあてるときに、同じ形の競技が自転車であって、それが「団体追い抜き」という名前で、そこから持ってきた。自転車の場合は走っているうちに抜くこともあり、追い抜いたら勝ちとなる。翻訳としては「追跡」「追いかけ」が正しいのだろうが、ルール上、追い抜けば勝ちになるので追い抜きとしている。現地のデスクは、前回五輪でも使っているし、パシュートと書いても意味が分からないから「追い抜き」でいいと思ったらしい。バンクーバーのときは、ちゃんと( )でパシュートと入れていた。入れた方が分かりやすい。

「大ちゃんはパラに出ないの？」 障害児の言葉に上原は 朝日新聞 2018年3月13日  
一時競技から離れた間に、子どもにパラアイスホッケーを教える上原大祐(左) = 2014年11月、岡山市



平昌パラリンピックのパラアイスホッケー日本は1次リーグ敗退が決まったが、中心選手



の上原大祐(36) = NEC =

には、残り試合にも大事な意味がある。一度は競技を離れながら、障害がある子どもへの強い思いを胸にリンクに戻ってきた。「スポーツを楽しむ姿を見せて、子どもたちに自分もやりたいと思ってほしい」

2010年バンクーバー大会。自身の決勝点で強豪カナダを下し、銀メダルを獲得した。その後、世界最高峰のリーグがある米国へ渡った。子どものクラブの練習に参加し「障害のある現地の子どもがたくさん、笑顔でスポーツを楽しんでるんですよ。そんな環境、日本にはない」。そこで思った。「自分が役に立てるんじゃないか」

帰国後、引退を表明した。背番号と、ひときわ小さな体から付けられた米国でのニックネーム「ミニ」にちなみ、NPO法人「D-SHIP32 (ディーシップスミニ)」を立ち上げた。講演で全国を飛び回り、パラスポーツの体験会も開催。特別支援学校にボッチャの道具を贈る活動もしてきた。

ただ、ふれあう子どもたちから何度も言われた。「大ちゃんはパラリンピックに出ないの?」。昨夏、平昌パラリンピック出場をかけた戦いを控えていた日本チームの中北浩仁(こうじん) 監督からもラブコールを受けた。「現役じゃないと伝えられないこともあるよな」。戦う姿を見せるため、復帰を決めた。

半年あまり、NPOの活動の合間を縫ってトレーニングに励んだ。平昌では攻守の要としてプレーする。順位決定戦も合わせ、残すは3試合。「(13日の) チェコ戦は新しいスタート。残りは全部勝って帰りたい」。スポーツの喜びを伝えるための戦いは続く。(菅沼

遼)



## 教えて！ ヨミドック

精子によい生活は？  
サウナ 自転車 要注意

読売新聞 2018年3月14日

Q ひざの上でパソコンを使っていたら、機器の熱で股間が温かくなっちゃった。

ヨミドック それは精子に良くないですよ。

Q えっ！ どういうこと？

ヨ 精子は熱に弱く、精巣（睪丸）を温めるのはご法度。体温より低い35度を保つのが理想です。

ヨ だから、体の外にぶら下がっているんだね。

Q ひざ上でパソコンを1時間使うと、精巣の温度が2.6～2.8度上昇するとのデータもあります。パソコンの放熱や、姿勢を変えないことで熱がこもることが原因です。

Q ほかに精巣の温度を上げてしまう習慣はある？

ヨ 下着のトランクス愛用者は、ぴったりしたブリーフをよくはく人より、精子の数が多との研究があります。蒸し風呂のサウナも、限られた時間でも精巣を高温にさらすため要注意です。

Q すぐトランクスにして、サウナもやめよう。

ヨ そう神経質にならないで。ブリーフは、たまにはく程度なら問題ないし、サウナも頻繁でなければ心配ないです。ひざ上パソコンも短時間なら大丈夫ですよ。

Q ほかに知っておいた方がいいことは？

ヨ 自転車は股間の血流を悪くして、精子の通り道に炎症が生じるおそれがあります。毎日の長距離通勤や競技で乗る人は、穴あきのサドルが効果的です。

Q 聞いたことあるかも。

ヨ 意外と知られていないのが、肥満と男性型脱毛症治療薬フィナステリドの副作用です。精子を造る男性ホルモンの量や働きに影響を与える恐れがあります。

Q 喫煙はどうですか。

ヨ 精子の数や動きを悪くし、DNAも傷つけてしまいます。過度の飲酒も同じです。

Q 減った精子は元に戻らないの？

ヨ 精子は精巣で3か月弱かけて造られます。イタリアのサウナに関する研究でも、サウナをやめて6か月たつと精子の数は戻りました。要因となっている生活習慣を改めれば直るので安心してくださいね。

(中島久美子／取材協力＝岡田弘・独協医大埼玉医療センター泌尿器科主任教授、兼子智・東京歯科大市川総合病院産婦人科講師)

